

両親

最愛のバガヴァンの蓮華の御足にお祈りを捧げます。親愛なるサイファミリーの皆様、そして学生諸君に「サイ ラム」とご挨拶申し上げます。

二、三日前に、バガヴァンは「ヒンドゥー (Hindu)」という語の定義を与えてくださいました。この語の始めの文字は、謙虚さ (Humility) を表す “H” です。謙虚さとは、目上の人を敬う振る舞いのことを指し、その目上の人とは両親から始まります。人は、両親への深い畏敬の念を抱いていなければなりません。なぜなら、すべては両親のお陰だからです。両親がいなければ、私たちがここに存在することはありません。「汝の父を敬え、汝の母を敬え」と『聖書』には書かれています。また、もし人がそれを怠った場合はどうなるか、という予言についても記されています。

誰もが口を揃えて、「この国は今、ダルマ (正義) が衰退し、アダルマ (不正) が高く評価されるというひどい状況にある」と言います。誰もがお手上げ状態であるとあきらめ、この先は一体どうなってしまうだろうと感じています。「慈善は家庭から始まる」と言われているように、私たちが家庭でダルマを遵守するなら、緩やかではあっても確実に事態は収まるでしょう。私たち全員と学生諸君にとって第一のダルマとは、(皆さんには将来の事であり、私には過去の事なのですが) 年老いた両親の面倒を見ることです。これは昔からの伝統だったのですが、他の昔からの貴重な数々の慣習と同様、急速に失われつつあります。それは、シャーストラ (経典) の中に次のような格言があると論じられています。

「老年期になると両親は『ヴァーナプラスタ シャマダルマ』へと移行し、森へ入らねばならない」これは都合の良い誤った解釈です。いずれにせよ、森など存在していません。木々はすべて切り倒されてしまったのですから。「ヴァーナプラスタ (林住期)」という語は本来どのような意味なのでしょう？ それはバガヴァンが説明なさったように、

「高齢者は世俗的活動 (家長) から身を引いて、内なるものに目を向け、心身共に安らかに過ごしながら霊的な道を進んで行く」という意味に他なりません。これは両親が家から追い出されるという意味ではありません。両親は息子の家に留まりながら、霊的な道に集中するという意味なのです。また、両親はある面で私たちの助けにもなります。

例えば、(これは、昔は慣習だったことですが) 祖父は孫たちに教育を与え、

孫息子らに手本を示しながら「サンディヤー ヴァンダナム」（日の出と正午と日の入りの礼拝）を教えました。祖母は、『プラーナ』（古伝説）からの物語を読み聞かせ、それによって若い子どもたちの心に霊的な渴望の基礎を築きました。しかし、悲しいかな、今日起こっていることと云えば、祖母と孫がお互いに競い合って、テレビの連続番組を見ているのです。

一方、両親にはいったい何が起きているのでしょうか？（ひどい事が起きます）私は深い悲しみと共に、ある年配の紳士に関する体験を思い出します。私はおよそ10年前に、このことに気づきました。かつて、デリーに住んでいた姉を訪ねた時のことです。この紳士とその奥さんは、彼らの息子と共にほんの二、三軒先の家に住んでいました。誰もその紳士の名前を知らないようでしたが、その紳士は『バーガヴァタム』（ヴィシュヌ神とその化身の物語集）に没頭していたため、バーガヴァタム ママ（バーガヴァタム小父さん）と呼ばれていました。その紳士は『バーガヴァタム』を朗読して、人々を幸せな気持ちにしていました。しかし、彼自身の生活は少しも幸せではなかったのです。彼の息子は仕事に行き、孫たちも学校に行き、息子の嫁も仕事に出かけていました。嫁は家を出る時、食べ物をすべて冷蔵庫の中に入れて鍵をかけていました。残された夫婦が昼食にとる食料は、一杯のコーヒーすらなかったのです。この夫婦は本当にお腹を空かせて飢えていました。そのため、私の姉はこの夫婦を気の毒に思い、彼らに何か与えるさまざまな方法を考えました。姉はよくこう言っていたものです。

「私は断食のしきたりを続けているので、私の家に来て昼食を取って下さい」それから、姉はこの夫婦にサリーなどを手渡していました。すると彼らはひどくうろたえて言いました。

「ほら、私たちは人に見られています。どうか恥ずかしい思いをさせないでください。私たちは家に帰ります」それが彼らに関する話です。そしてこの話は、多くの人目につかぬ場所でさまざまな方法によって続けられました。

私は、息子が全員アメリカへ富を求めて行ってしまったある人物を知っています。父親はここ（インド）に一人で残されていましたが、父親には自分の収入がありました。始めのうち、息子たちは父親に会いに時々帰って来ましたが、しばらくすると帰って来なくなり、父親に送金してくるようになりました。

父親は次のような手紙を送りました。

「私にはお前たちの金は必要ない。私は金を持っている。私は老人だ。もし良かったら、帰ってきて私のそばで世話をしてくれないだろうか？ そうでなければ、お前たちはそちらで幸せに暮らさない。私に構わなくても良いから。お前たちの小切手を私に送ってくる必要はないよ」

これがこの国の悲劇です。私たちは次のように教えられてきました。

「マートゥル デーヴォー バヴァ　ピトゥル デーヴォー バヴァ」
(母親を神として敬いなさい、父親を神として敬いなさい)

しかし、今起きていることを見てください。最近、ある人がバガヴァンの昔の御講話を見せてくれました。それはもちろん英語に翻訳されていましたが、正確なものではありませんでした。ざっと目を通すと、ある一文が目にとまりました。私は即座にそれが誤った翻訳であることに気づきました。それは次のような文面でした。(明らかにバガヴァンが述べられたものではありません)

「女性が結婚する時は、自分の両親を捨てて、夫の家へ行きなさい」

スワミは決してそんなことはおっしゃらない、と私は言いました。おそらく、スワミはこう述べられたに違いありません。

「女性が結婚する時は、自分の両親の家を離れ、夫の家へ行きなさい」

結婚する際に両親を捨ててしまうのは、女性でなくむしろ男性のほうです。さらに悪いことに、今日、両親の面倒を見ているのは女性であり、男性ではありません。これは非常に恥ずべきことです。これを誇りに思うことができますか？ 両親に対する義務は自分が生きている限り終わることはありません。その義務は存続しています。毎年、両親の命日には息子が命日の儀式を執り行うことになっています。近年、様々な理由によってその儀式は行われていません。しかし、今もなお、人が行わなければならない重要なことがあります。その重要なこととは何でしょうか？ バガヴァンはある日、これをトライー（ホワイトフィールドのアシュラム）で説明してくださいました。バガヴァンはおっしゃいました。

「両親の命日にはどんな意味があるのでしょうか？ それは、あなたが感謝をこめて両親を思い出すための日です」

スワミのおっしゃったことを理解するために、命日の儀式の一部を簡単にお話ししましょう。儀式の始めに、聖火に供物を捧げ、マントラ（真言）などを唱えます。それが終わるとブラフミン（僧侶）の方々に食事を供します。大勢のブラフミンに食事を供しますが、彼らの中でも二人は特別であるとされます。その内の一人は、ナーラーヤナ神ご自身の代理人です。ナーラーヤナ神がおいでになり、食事を召し上がると信じられています。もう一人は、故人の魂の代理人です。それは場合に応じて、母親、あるいは父親となります。客人がやって来た場合、息子はその客人を飲んで迎え入れなければなりません。そして、

客人の足を洗い、彼らに食事を供します。

スワミはおっしゃっています。

「あなたが彼らの足を洗うとき、両親を思い出し、感謝の涙でその足を洗いなさい。あなたの目から涙が流れなければなりません。両親はあなたのために、どれほどの犠牲を払ったことでしょうか！ 少なくとも年に一度、両親を思い出しなさい」

実際、私たちは日々片時も両親を忘れてはならないのです。しかし、私たちはそうしていません。私は二日前に老人ホームについて話をしました。その現象はゆっくりとインドにも忍び寄ってきています。私たちはそのような好ましからざるテクノロジーを容認し、導入すべきではありません。私たちの文化はまったく異なるものです。それらは私たちの文化に馴染むものではありません。

最後に、もう一度バガヴァンについて、バガヴァンが語呂合わせに関して、独自の方法で、素晴らしく深遠で重要な御教えをどのように伝えられるかについてお話ししたいと思います。ある日、私が「戦士 (Soldiers : ソウルジャーズ)」という言葉を使ったとき、バガヴァンはそれを非常に上手に「魂を愛する人 (Soul Dears : ソウル ディアーズ)」と変換されました。ずっと昔、スワミは「両親」 (Parents : ペアレンツ) という言葉の語呂合わせをなさいました。スワミはおっしゃいました。

「ホテルや旅館に行って部屋を取れば、あなたはその部屋代を支払います。両親とは、あなたが『部屋代を支払う』相手 (Pay rent : ペイ レント) です」

「なぜ私が両親に部屋代を払わなくてはならないのですか？ 私はここに一人で住んでいます。私には自分の家があります」とあなたは言うかもしれませんが。それは間違いです！ この(自分の)肉体は両親が所有している家なのです。両親がいなければこの肉体はありませんでした。この肉体に住んでいるため、私はその部屋代を払わなければならないのです。どのような部屋代でしょう？ 『感謝』という部屋代です。その部屋代は途切れることなく支払わなければならない。部屋代の支払いを怠ってはなりません。これが私の伝えたいメッセージです。もしあなた方がこれを守ればこの国は大きな転機を迎えることになるでしょう。なぜなら、これはダルマの始まりだからです。最初のダルマとは、両親を敬い、両親に感謝の意を示すことなのです。

ジェイ サイ ラム

G. ヴェーンカタラーマン教授

1996年8月18日

出典：“The Study of Sathya Sai”